

【塩野川沿革史】 塩 野 川 源 流 を 訪 ね て

梁川町郷土史研究会 大 橋 彰

塩野川源流は三浦弥平翁が拓いたオリンピック山の峰続き「胴切」辺りとされている。昔、集中豪雨で山崩れを起こし、山の半分がえぐり取られた形からそのように呼ばれるようになった。そこに発した源流は、清水沢と呼び、里に下って白根川、さらに郊外に入って塩野川と名称を変え広瀬川に合流する。総称して塩野川と呼び総延長11kmの一級河川である。

昭和初期は、塩野川橋（現在の西塩野川橋）から下流を塩野川と言い、そこから上流梁川区間を町谷川（待屋川）と言った。

塩野川の語源は昔、相馬から牛で塩を運んでいた頃、誤って牛もろとも川に転落、塩は深い溜まりに落ち塩辛い水となり、この川を「塩野川」、深い淵を「塩の淵」と呼ぶようになったと言う。

昭和の中頃は水量も豊富で「塩の淵」は子供たちの水遊びの場であり、小魚からウナギ、カニなども生息していた。近年は水量の変化で魚の棲む環境は厳しいものの清流を取り戻し、塩野川は町内会のシンボルとして、町内行事も活発に行われてきた。

「塩野川源流を訪ねて」もその事業の一環として昭和57年に行われた。“ふるさとの川”の源流を一目見ておきたいとフィールドワークには老若男女40数名が参加した。マイクロバスで沢つたえに上ること15分、清水観音堂に着く。残暑とは言えここは別天地、木漏れ日みそが爽やかだ。

観音堂の向いに禊ぎ場がある。川幅は

2m足らず。ここを源流と見立て記念に標柱を立てた（現在は腐食し消失）。その先は山路が深く、これ以上の探索は控えた。



源流を訪ねた塩野川町内会の人たち(昭和57年)

この日、清水観音堂を特別に開帳して頂き、地元の古老の話を聞くことができた。

源流の先は霊山、地図に表示の小道も途中で消えている。標高は450m。地図から消えた小道は、当時、霊山寺が奇襲にあった際の避難経路ではなかったかと古老は語る。

溪流から汲んだ水でお湯を沸かし、お茶をご馳走になった。「塩野川の水が飲める…」里では到底考えられないことである。

さて、塩野川の源水は「白根の山奥に湧き出る清水」と伝えられていた。

そこに辿るには清水観音堂からさらに沢を20分程上る。すると山肌から湧き水が滴り溪流となって水しぶきをあげ里へ下る。途中「梅ノ木沢」「白井沢」「馬場沢」等と合流して「白根川」と名称を変え広瀬川へと注ぐ。悠久の流れは数々の伝説を生み人々の心に夢を与えてくれた。「くるか橋」や

「流れ観音」、塩野川の由来を語る「塩の淵」、
「火明」の地名など、川は日常の生活に溶
け込み共存してきた。



「くるか橋」の伝説を伝える碑

しかし、時として洪水という自然の驚異
に向き合わなければならなかった。

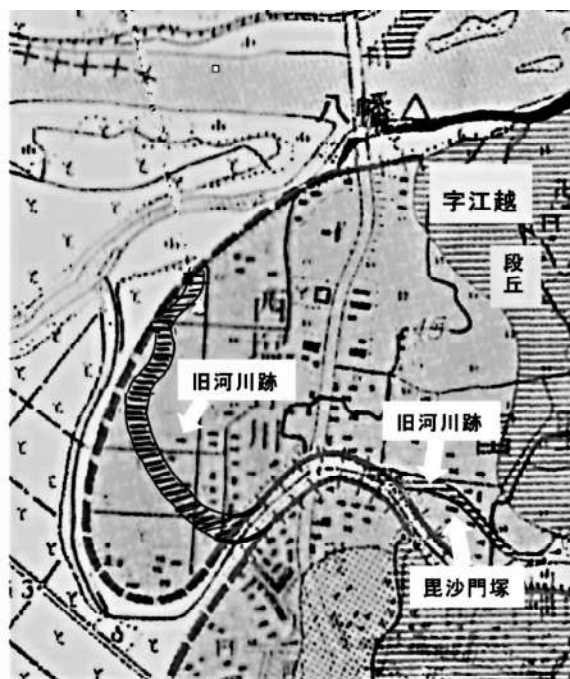
古書に天神社裏から八幡神社西寄りに蛇
行して阿武隈川に合流したと思われる河床
跡が描かれている。その河床を検証する段
丘が現在も見られ、その地一帯の字名は「江
越」で「江」は川、湖などを指し「特に陸
に入り込んだ部分」と広辞苑にある。即ち
「江越」の地は塩野川の河口であったか阿
武隈川が入り込んだ地帯であったと想像で
きる。

興国寺は昔、塩野川の向い側にも敷地が
あった。川の流れが変わり土地が分断され
たのだろうと言われている。右図にそれと
見られる河床跡がある。

さらに、同絵図は秋葉神社裏から鋭角で
舟場方面へ流れていたことが分かる。西塩
野川の伝説にある「姫御前の生石」の「沼」
とは、その河川床の跡ではなかったか。

昭和の初め頃まで、北町谷川地内に延長
20間ほどの石積みがあって、そこに毘沙

門天を祀り「毘沙門塚」と呼んでいた。も
しかしたらその石塚は、河川敷の改修工事
で出た川石を積み上げ、鬼門除けに毘沙門
天を祀ったのかも知れない。このナゾの巨
大な遺構や興国寺の分断された土地、また、
肥沃な耕地を洪水から守るために、先人は
川を制することに必死だったのではなかろ
うか。



旧建設省が想定した塩野川河川跡

源流を訪ね、塩野川の水を沸かしたお湯
で一服のお茶をご馳走になったとき、私た
ちは川を汚さない自然の大切さを学んだ。
近年、河川愛護の精神が高まり毎年、クリ
ーン作戦を全町民参加で行ってきたことで、
川は昔の清流に戻ってきた。シラサギが小
魚を追い、カモの親子が列をつくって戯れ
ている。今年は例年になく数多くの鮭が塩
野川を遡上していた。